

ジャックナイフを見つめながら

山下洪文

夢みていた。

君の胸に溜まりつづけた朝焼けと、僕の胸に溜まりつづけた夕焼けが、いつさんに溢れだす時を。

夢が終わると、向日葵畑を歩いた。

うちやまぬ波のように、ちいさな路を往き来していると、いつしか、灰いろの小鳥が、僕たちの跡をたどっていた。

ふりかえったまま、佇んでいると、

小鳥は、君の乳の影をついばんだ。

ナイフが閃き、頼りない羽ばたきは遠ざかっていった。

君に買ってあげた、偽の宝玉が鏤められたジャックナイフ。

白い羽の降りしきるなか、

僕は、その切っ先にうつる、君の赤い唇を見つめていた。

君は人殺しのようなことを言った。

本当にそうできたなら――

一糸まとわず、泣きながら、君の足下にすがりつくことができたなら。

落ち葉のようにちいさな想いが、

胸をよぎり、土に落ちる。

僕たちはそれを踏みしめて歩いた。

風はやんでいた。向日葵の花は、優しい瞳のように、中空にとまっていた。

静寂があたりを領し、

その外に、鳥たちは飛び交っていた。

ナイフを鏡にして、僕たちはそれを確かめた。

ナイフを鏡にして、僕たちは見つめあった。

切っ先に、日の光が滴り落ちる時を、僕たちは待った。

日の光が刺されて、息絶える瞬間を、僕たちは待ちつづけた。